

王朝歌物語の研究と新資料

中田武司

なか　だ　たけ　し
中　田　武　司

昭和9年10月岐阜県高山市下林町に生まる。
昭和34年3月國學院大學大学院修士課程修了。
現在　専修大学文学部助教授。
主著　「泉州本伊勢物語の研究」(白帝社)

王朝歌物語の研究と新資料

昭和四十六年十一月十五日初版印刷 昭和四十六年十一月二十日初版発行		著　　者	中　田　武　司	定　価	六八〇〇円
		発　行　者	及　川　篤　二		
		印　刷　所	㈱第一印刷所		
		101	東京都千代田区猿樂町二一―一六		
		㈱	桜　楓　社		
		(電話)	(〇三)二九一―五六六一		
		(振替)	東京一八〇二〇		

序

白田甚五郎

本書の著者中田武司君は、このところ、見る／＼うちに、国文学者としての風貌がととのつて来た。専修大学文学部の教壇に立ち、研究室に入るやうになつて、そこによき先達学友を持つことができたと思はれる。同君の学究的人間像が大地に根をおろした充実ぶりを見せて来たのは、専修大学文学部の御かげにますかげはあるまい。

そのことをよく知りながら、敢へて本書に序文を寄せるのは、中田君が飛驒の山国から笈を負うて上京し、國學院大學文学部に入つた当時、私も助教時代若々しい意欲を燃やして同君に触れた機縁がよみがへつたからである。

はやくから、中田君は『伊勢物語』の研究に手を染めてゐた。恐らくは、國學院大學に入学する前からであつたらう。飛驒の高山で高等学校生徒として過してゐた時から、伊藤眞琴教諭の薫陶を受けてゐた。伊藤氏は、國學院大學国文学科を卒業した俊秀で、現在星薬科大学教授の任にあられる。伊藤先生は高山の若者たちから第二の田中大秀として仰がれてゐた。伊藤先生はきびしいしつけを以て、人間と学問の修行を青年に課して居られると聞いた。第二の大秀の膝下にあつて、中田君は王朝物語への憧憬を刻みつけたにちがひあるまい。

大秀の『竹取翁物語解』は、今日も高い評価を受けてゐる。中田君の胸裡に大秀の国学者魂は継承されたと信ぜられる。同君は大学生時代に已に『伊勢物語』の研究書を私家版で試みに成し上げた。正直に言つて、当時はまだ青年の血気が先に立つてゐたので、天馬空を行く言説がなきにしもあらずであつた。それがどうだらう、今や変貌に近いと言へよう。見事な転進をはたし、驚くべき躍進を示した。

さきに白帝社から刊行した『泉州本伊勢物語の研究』によつても分る通り、中田君の学問世界は、文献資料との対話から開かれたのである。冷静に徹底的に文献資料を透視し、診察するのであつた。

できるだけ、客観的な打診を研究対象に、万遍なく試みる態度は、今次の著書『王朝歌物語の研究と新資料』にあつても堅持せられてゐる。その上で、洞察の征矢は鋭く射込まれるのである。主体的燃焼の焰が噴き上る砌に、はつと息をのむやうな創造的意見が飛び出るのである。そのひらめくものを見るのがたのしみで、執拗な現象分析の跡をも追ひかけ読んだ次第である。

本書は、王朝歌物語といふ好個の研究テーマを設定して、中田君得意の『伊勢物語』に加へて、『平仲物語』と『大和物語』が舞ひ込んだから、役者が揃つた華々しさを感ぜさせる。それにもまして、光り輝くものは、建仁二年奥書本（寂身本）『伊勢物語』の本文を翻刻して、天下に紹介したことである。

私は常に言つてゐるのだが、常に恋ひ焦がれる熱情が、すばらしい恋人にも出あへるし、望ましい資料にもめぐりあへるやうにするのだといふこと。もしまだあへないならば、それは熱情が足りないのだといふこと。中田君の『伊勢物語』に寄せる烈しい思ひが、つひに建仁二年奥書本『伊勢物語』を引きつけたのだといふよりほかあるまい。

昭和四十六年十一月十日曉更

王朝歌物語の研究と新資料

目次

序

第一章 歌物語の源流	九
------------	---

第二章 伊勢物語論	三七
-----------	----

第一節 伊勢物語の主胎	三七
-------------	----

第二節 伊勢物語の粉飾	三二
-------------	----

第三節 伊勢物語の構成形態	三四
---------------	----

第四節 伊勢物語の伝本と原撰	三九
----------------	----

伊勢物語伝本攷	三九
---------	----

建仁二年奥書本（寂身本）の成立	一〇一
-----------------	-----

泉州本伊勢物語の成立	一〇一
------------	-----

原撰伊勢物語攷	一二六
---------	-----

第五節 伊勢物語の周辺	一二六
-------------	-----

在中将集と伊勢物語	一二六
-----------	-----

第三章 平仲物語論	一三〇
-----------	-----

第一節 平仲物語の題名	一三〇
-------------	-----

第二節 平仲物語の構成形態	一三〇
---------------	-----

第三節 平仲物語の生成——原撰定文歌集の形態——	一三八
--------------------------	-----

第四節 平仲物語の周辺	一三〇
-------------	-----

古今集・後撰集と平仲物語	二二〇
第四章 大和物語論	二六六
第一節 大和物語と伊勢物語	二六六
第二節 大和物語の主胎	二六九
第三節 大和物語の構成形態	二七一
第四節 大和物語の題名と作者	二七七
素材と作者攷——勅撰集との関係——	二八二
第五節 大和物語の周辺	三〇五
後撰集と大和物語	三〇五
女房日記と大和物語——かげろふ日記の場合——	三二五
大和物語と歌語り	三三五
第五章 歌物語の享受	三三〇
第一節 歌物語の享受攷	三三〇
第二節 三光院の伊勢物語注釈	三三一
第三節 宗久の『都のつと』と伊勢物語	三六九
新資料	三八二
一 定家本伊勢物語と新資料解題	三八二

二	建仁二年奥書本（寂身本）の本文	三七
	付・「勘物」対照一覧	四三
	「和歌に関する注記」対照一覧	四三
三	伝牡丹花肖柏筆本伊勢物語解題	四八
四	烏丸光広筆本伊勢物語解題	五三
	あとがき	五九
索引		六三

王朝歌物語の研究と新資料

第一章 歌物語の源流

一

日本文学史の中で一つのジャンル区分される「歌物語」は、時として伊勢物語にはじまると説かれ、大和物語はその模倣であるとし、伊勢物語の叙事的背景が源氏物語へ連繋する思想となると論じられる場合が多い。多いのみならず文学史教材の多くはこれを可としているようである。この伸延性なり展開は、ある面、例えば解題に終る文学史などならば多少は許容もされ、正しいとさえも言えよう。しかし、現実に歌物語をそれぞれに思考し分析する立場でみると、伊勢物語は一つの峠をこそ構成はするもののその源流ではないことが明らかとなるのである。峠の手前中腹から分岐したのが大和物語であってみれば、麓から中腹を抜け峠に至らず山越えをしているのが平仲物語であることが理解されるのである。そしてその山麓の袂の道ははるか直線的に古事記日本書記に続いているのである。それ故歌物語の源流は、やはり記紀に遡源されるべきが正しい姿であろうと思われる。特に大和物語は、長い間伊勢物語の素材の洗練された優秀性にかくれてその真の評価がなされなかった観がある。勿論伊勢物語の生成は日本文学史上貴重なものであることには異論はないが、叙事文として展開された竹取物語との関係は無視されたい。これらの点からも歌物語の源流の把握をし、考察を加え本著の序説としたい。

永観二年（九八九）頃に成立したと考えられる仏教説話集『三宝絵詞』（源為憲^{（注1）}）の序文には当時世に流通していた物語は「ありそみの浜の真砂」よりも多かったという。『三宝絵詞』より二〇年を経て成立した源氏物語の時代には源氏物語の不思議な魅力に浮かれたとはいいいながらもやはり物語の数ははるかに多くを数えたものと思われる。勿論これらの大多数は今日散失して、名のみ残るものが多い。源氏物語の生成と流布を時代的現象面とらえると、恰も叙事文芸が社会的に優位であるかのようにとられやすいがはたしてそうであろうか。源氏物語の時代には、すでに「古物語」とか「物語の出できはじめの祖」などと伝えられていた「竹取物語」^{（注2）}があり、これに源氏の作者少なからず注目するものがあつたに違いない。そして竹取にみられない何かを源氏の性格に生かそうとしている。だから源氏の作者は、「物いはぬ物に物いはせ、なさけなき物になさけを付け」たり、あるいは「男女などに寄せつゝ花や蝶といふ」人間の生活を「はかない物」という見方を通して展開しているようである。そしてこの発想の基幹には仏教的輪回思想もあつたであろうけれども「和歌有心」の思想が強くあつたものと考えられる。すなわち文芸でいう抒情文芸の優先思想という思潮を源氏の作者は意識していたといえよう。源氏の作者は物語の創造者でありながら、その作品を自己とは離れた特異なものとして、しばしば意識していることが知れる。この客観的な思想の中にも、「歌」は常に詠者とともに伝えられて来ている思潮に対して、物語はそのほとんどが作者と同一ではないことを源氏の作者は強く意識していたものと思われる。

「物語の祖」といわれて来た「竹取物語」でさえ、今日ではその作者が誰であるのか、またその成立事情も不明であるが、源氏の作者も物語の祖とは認めながらも、それは誰の作であるということにはあまり関心を示していな

いのは、物語が歌とは異なるものという意識の表われとも考えられる。

「竹取物語」に例をとり、その物語的素材を考えると主人公の多いことも含めて、その遠因は、丹後風土記逸文―奈良社―にみる「比井天女八人降来浴水」という比治真奈井の譚や「帝王編年記」の伊香小江の譚やその他後年謡曲「羽衣」にみる伝承や「鶴女房」の伝説的な要素をまとめるという形であるために、主人公の複数化が自然に発想の中にあつたものといえるのである。^(注3)

広い意味での「竹取物語」(かぐや姫の物語)は実にこれを「竹取説話」だけについてみても、すでに高崎正秀博士の『物語文学序説』^(注4)において論考されたように、また三谷栄一氏の『物語文学史論』^(注5)にみるようにその源流は深い。ところで「竹取物語」の素材を文献でみると種々あるが、その一例を万葉集(巻十六、三七九二)でみると次のように注目すべき内容を展開している。

「昔有^レ老翁。号曰^ニ竹取翁也。比翁、季春之月、登^レ丘遠望、忽值^ニ黄^レ鵒^ノ之九箇女子也。(略)非^レ慮之外、偶逢^ニ神仙、迷惑之心無^ニ敢所^ニ禁、近狎之罪、希贖以^レ歌。即作歌一首 并^ニ短歌一

3791 緑子の若子が身にはたらちし母に懐かえ^{うた}襦袢^{はたき}の平生が身には木綿肩衣……宮女さす竹の舍人^{むすこ}壮士も忍ぶらひ…

…古の賢しき人も後の世の鑑にせむと老人を送りし車持ち還り来し持ち還り来し

△反歌二首▽

3792 死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髪子らに生ひざらめやも

3793 白髪し子らも老いなばかくの如若けむ子らに罵らえかねめや

△娘子等^{ななごら}和調九首▽

3794 はしきやし翁の歌におぼしき九の児らや感^{かま}けてをらむ

これに続いて以下娘子らが答えた歌九首をみるのである。右の長歌については松村武雄氏の『万葉伝説歌考』や竹野長次郎氏の「万葉集と庶民性」などでも論考されたがいわゆる竹取翁をめぐる説話群の断片であり、これが万葉集において遊仙窟的文章で潤色されたものである。しかしこの内容が単なる断片ではなく時としてまとまった物語としてわれわれの前に登場するのである。例えば今昔物語集(三十二)をはじめ海道記、古今集註(為家)、桂川地蔵記、三国伝記、臥雲日件録や詞林采葉抄にみる如きである。中には異伝とみられるものもあるが、これらを分析すると、竹取・翁を中心に展開しつつもその根幹には「こ(籠)に入れて養なう」という思想があり、これが次第に演繹化され伝承されたものとなっているのは注目しなければならない。しかし、これは前記の資料をもととする分析であるから、この現象の背景にはこれよりもかなり複雑なものがあるいはごく簡単な譚があったことも一応考えなければならぬが、ある伝承が物語化されるには複雑から単純化よりも、逆の場合が多いようである。それ故、今日われわれの目にふれる資料の中で、その素材を指摘することも十分考えられてよいであろう。これからすると、竹取物語と前述の素材との関係は、やはり古い伝承の一片が素材に止まる程度でこれに関与していることがわかるのである。例えば今日伝わる竹取物語の成立期をみた場合、内部徴証からして成立期の上限は弘仁期(八一〇—八三三)でその下限は天曆期(九四七—九五六)とおさえられるから、この間、凡そ一世紀にわたる広汎な期限を考えざるを得ないのもこの説話の文学化の性格の一面を示しているものといえるのである。

三

先に示した万葉集の長歌の如きも、その生成からみると古事記、日本書紀の歌謡の性格を完全に脱皮払拭できない伝統の表現をもっている。その伝統的表現が竹取物語を中心にみる場合にも指摘できるのであるから、竹取物語

はいわゆる記紀の叙事、抒情の両面を一つにまとめようとした一種の作品のパターンとして認めることができる。いわゆる竹取物語は叙事を叙事的のみではなく、抒情の世界として説話素材を展開せしめたものといえることができる。この素材の展開こそは後世歌物語というジャンルを生む源であるといえよう。しかれば歌物語の素材はと考察すると、その素材はすでに古事記にみる「語り部」の語りぶりにもみることができ、「語り部」についてはすでに折口信夫博士によって詳しく論じられているが、博士によると、その原型は「国風」にあると説かれている。

この「国風」の語りという行動現象が長く続いたため、この伝承の断片が物語化されるようになったものと考えられる。この「国風」は平安初期には「風俗」と称されるようになったものであることは今日、一般に理解されているところであり、『古代歌謡集』（日本古典文学大系）に収められている風俗歌や東遊歌などをみることにしても十分理解されるところである。特に「東遊歌」の中には、「手を調へろな」（ととのえよの意）「相模」（さがみ）とか「あぜか」（なげか）などの東国方言がそのまま用いられており、古代東国方言の資料としても大切なものである。また、「風俗歌」にしても、

小筑波を越ゆすぐり来ぬ帰り来てや誰が恋ひすぐや小筑波を越ゆすぐり来ぬ

と「小筑波」にみえるこれなども恐らく、筑波山を越えて帰った男が、連れの男に向って、「あの辺で後髪ひかれた奴があったらしいぜ。誰だい、色男は」といわば野次った趣きを詠んだものと解せる。そして、これに関して思われるのは、更級日記に記す「足柄山の遊女」の記録である。更級日記ならずとも、常陸の国にもこうした遊女の類の集団的歌語りが流通していたことが知れるのである。この「小筑波」をはじめ風俗歌に、甲斐・常陸などその地方の国名を負う歌の多いことをみると風俗歌の源流に「国風」を考えることも十分理解できるのである。そして現在の風俗歌のどの一つを例としてもすべてに歌物語的素材と語られるべきテーマとがあることに気付くのであ

る。すなわち風俗歌のもつ民謡性である。かつては地方の民謡であつたものがやがて形式も統一されて宮廷に入るようになる。そして宮廷に入った場合、第一に受けとめるのは他ならぬ「宮廷女房」たちであつた筈である。源氏物語の時代でもしばしばみられる宮廷女房の職掌の一つに、貴人に対する感染教育がある。その場合の教育素材としては歌が口伝され、その歌のテーマが物語られたことは想像に難くない。歌を伝承し、物語を聞かせることは、とりもなわず過去の知識の伝授に通ずる訳である。

女房は時として語部的性格をもつたことは枕草子にもみえるところである。しかし時にはその度を超すこともあつた。万葉集の志斐姫の「強語り」はその一例ともいえよう。卷三にみる例は、

天皇賜志斐姫御歌一首

236 いなと言へど強ふる志斐のが強語りこのごろ聞かずてわれ恋ひにけり

志斐姫奉和歌一首 （姫名未詳）

237 いなと言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語りと詔る

と、天皇と志斐姫との問答歌体であるが、天皇が日頃語部の志斐が種々の語りをするのを聞いていたことを示すものといえよう。右の歌意は天皇が「聞くのはいやだというのに、強いて聞かせようとした志斐の姫の強語りをこの頃は聞かないので、わしは聞きたくなつた」というのに対して、姫が「もうこれまで、と申しあげてもまだまだ語れ語れとおっしゃるので、わたくしはお話しを申しあげるのでありますのに、強語りなどと言われますのは、ひどいことでございます」といった内容のものである。勿論ここである「語り」も語部の本旨としての素材がそうであつたように「歌」が中心であり、それに付随して物語がなされたものと考えてよいであらう。こうした「歌」の必要性は単に「語部」のみでなく、当時の宮廷女房の生活の中にも滲透していたものといえよう。例えば「枕草子」（注）